

えいらい

No.40

令和 元年 7月発行
発行元／一般財団法人永頼会 松山市民病院



〒790-0067 愛媛県松山市大手町2丁目6-5 TEL / 089-943-1151 FAX / 089-947-0026
発行責任者／院長 山本祐司 編集／松山市民病院広報委員会



近未来の超高齢化社会に おける地域医療を思う



副院長 伊勢田 徳宏

この度、2019年5月1日付けで副院長を拝命しました、泌尿器科の伊勢田です。2002年に着任し、一医師として地域医療に携わってまいりました。今後は、地域に根ざした医療機関としての当院の立つべき位置を考え、その役割を病院全体で果たせるよう努めてまいります。今後のご協力、ご支援をよろしくお願いたします。

今年の当院のスローガンは「地域社会とともに歩む医療—キーワードは環境、機能、活動—」です。病院環境を整え、医療機能をさらに高める、そのために、7月に受審する病院医療機能評価をより高い機能で更新すべく、各部署が準備を進めてきました。

ご存知のように、近未来の2036年には、国民の3人に1人は高齢者になると指摘されています。高齢者の健康寿命の延伸が重要な課題となっており、地域医療の在り方も徐々に変革していかねばなりません。

地域の中で、いかなる立場で医療機能を果たしていくか？当院の理念の一つである「松山市民病院は高度急性期医療を目指す」ことを踏まえて、私の専門である泌尿器科の立場を考えた場合、泌尿器科の手術は今やRobotic Surgery(ロボット手術)が主体となっています。しかし、中予地区だけで4施設に手術支援ロボット「ダビンチ」が導入されており、この現状では当院への導入は困難です。

幸い当院では、尿路結石に対する治療環境は、経尿道的結石破碎手術(レーザー手術)・体外衝撃波手術と、ある程度整った状態で、確実に近医からの結石症例の紹介は増えております。

結石をFreeにするだけが治療ではなく、栄養管理室、生化学検査室とも協力しながら、再発予防も念頭に置き、将来的には結石センターなどの設けができればと考えております。さらに、超高齢社会に伴う排泄ケアも大切な課題と捉えています。

少子・高齢化社会において、生きるためのQOL(Quality of Life)はもちろん大切なことですが、超高齢社会のもう一つ大きな問題は、介護ケア・看取りだと思っております。

私が研修医の時代から、人は病院で亡くなるのが当たり前となりました。死が身近でなくなり、親しい人の死に対して動揺し、「人は、いつかは死する者」であることを忘れがちになっている今、欧州では「死の質」QOD(Quality of Death)が提唱されています。それは、終末期医療・緩和ケアに対して、環境・人材・費用・ケアの質・地域社会との関わり・宗教的ケアを指標化したもので、1位はイギリス、日本は14位となっています。

緩和ケア進展の必要条件として、国の方針が大切ですが、医師・看護師の教育、柔軟な姿勢で地域社会での死に関する意識向上の取り組みは徐々にでもできうることも知れませんが。

最後になりましたが、超高齢社会により、医療現場でのニーズも刻々と変化しています。それに対応するため、スキルアップを図り、微力ながら地域医療に貢献してまいります。今後とも、ご指導・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

撮影：医事企画課／魚見 直史 (内子町石畳 弓削神社太鼓橋)